

セルロイド人形 パーパー(3)

パーパー(1)(2)に小林大八セルロイド工場の話がでました。

小林大八氏は、自宅近くの千草セルロイド工場(現在の葛飾区立渋江公園にあったセルロイド工場)で技術を習得したのち、大正14年に自らもセルロイド工場を設立しました。



小林治夫様宅と小林駐車場

現在は、大八氏のお孫さん・小林治夫さんがセルロイド工場の跡地で金属プレス加工業と小林駐車場を経営されております。

(町の文化と歴史をひもとく会編・木根川の歴史2、参照)

東京葛飾区では、小林大八セルロイド工場さんは今も有名です。それは随筆家・豊田正子を書いた「綴方教室」が岩波文庫になって販売されたことや映画化されたため、と言う話です。

豊田正子は昭和8(1933)年・本田小学校4年生のとき、大八セルロイド工場アルバイトをしていました。その仕事はセルロイドで作られたパーパー人形の色塗りでした。そして正子は大八セルロイド工場で体験したことを「彩色屋」というタイトルの作文を書きました。

正子は、小学校で担任教師の大木健一郎先生に指導され作文(綴方)を書いていたのでした。正子は大木先生の自宅に度々伺って特別に指導を受けていました。

大木先生のご自宅は、セルロイドハウス横浜館と関係が深い葛飾区四つホー丁目の上條金型工場さんの隣にあったようです。(葛飾区木根川資料館運営委員・石戸輝久さんにお逢いしたとき伺いました)

そして正子の作文が、作文教育の機関紙“赤い鳥”に入選しました。

「赤い鳥」は、夏目漱石の弟子だった鈴木三重吉が主催する人間教育の雑誌でした。この誌には当時から有名な島崎藤村・芥川龍之介・北原白秋らの作家や詩人達も携わっていました。



赤い鳥の発行は1918～29年、少し休刊して、1931年1月～36年8月でした。

* 80年前の「赤い鳥」が横浜館に展示してあります *

それから昭和13(1938年)年、「綴方教室」という題名の映画が東宝で製作されました。

高峰秀子(通称デコちゃん)が、豊田正子役の主演でした。

監督は東宝の山本嘉治郎でした。左の写真は、「綴方教室」の撮影が完了した際、菊地寛の司会で秀子13歳と正子15歳が会談したときのものです。



正子と秀子の二人がなくなった翌年に、東京中央区京橋の日本フィルムセンターにて「綴方教室」の追悼映写会が行われました。このとき映画のビデオも売り出されたのですが、買いそびれてしまいました。

豊田正子 1922(大正11)年11月～平成22年12月9日、没(89歳)

高峰秀子 1924(大正13)年3月～平成22年12月28日、没(87歳)

綴方教室の項目の一つ「彩色屋」から、以下の文章を抜粋しました。セルロイド人形パープー製作の最終工程・彩色を想像していただければ幸いです。

4年生も終わりの3月に、同級の渡辺さんが私と中沢さんに、

「あんた達、学校から帰って何んにも用ないんでしょ。もしなかつたら、あたしの行っているところへ来て働けば」と言った。私は知らないので、

「あら、あんた仕事に行ってるの、えらいわね、どんな仕事」と聞くと、渡辺さんはちよつと得意そうに、

「あたしの仕事はね。セルロイドで、ほら、お人形さんの手や足ね、あれが、これくらいの大きさのセルロイドに、いくつもあるの、それを」

と言いながら、両手で何かをちぎるような様子をして

「ばらしてけずったりなんかするのよ、やさいわ、その家ね、第一工場と、第二工場にわかれていてね、第一は兄さん、第二は弟で、兄弟でやってんのよ」

とあつくちびるを重そうに話してくれた。

私は、今学校でお弁当までもらっているんだから、母ちゃんもきつとお金がないから、あたいが少しでも働いてやろうと思ったから、

「渡辺さん、その工場どこにあるの」というと、
「工場はね渋谷のお宮様のうらよ。ねえ、中沢さんと豊田さんいかな
い、ね、いきなさいよ、行くのなら、あたい聞いてやるわ」

あくる日学校へ行って渡辺さんに言ったら、
「あたしがねえ、昨日聞いたのよ。したらさ、うちはもう手が多いから、
第一工場なら入れるって、第一工場だっていいでしょ」
「ええ、どっちだっていいわ、中沢さんも第一工場だかっていうところですよ。でも、そこの仕事むずかしい
かしら」
「大丈夫よ、彩色よ、お人形さんに色ぬるのよ、なんだか面白そうよ」



1メートルぐらいのドブを前に、茶色くぬった波トタンのへいがまわっている家がある。へいには白ペンキで、
手の平ほどの大きさで、小林工場と書いてあって、小林と工場との間に大八という紋を入れてあります。

事務所の入り口に自転車が2、3台あって、中に5、6人いるようだった。事務所のガラス越しに、開け
放しの、トタン造りの、セルロイドの大きな人形が積んである部屋に白いカッポウ着を着た人が2、3人見え
て、その部屋のとなりはプレス場で、ゴーゴーと火の音がして、時々ザザーッと水を流す音が聞こえる。

プレス場のわきにあるトタンばりの土間には、人形のまだ切り放しをしていないのが、バラバラになげ
てる。

プレス場によった工場には、入口の戸の上に磨き場と書いた木の札がぶらさげてあって、右方は、彩色
場と書いたのが、ぶらさげてある。私の働くのは、ここだなど思いながら見ていると、事務所から青白い顔をし
た、鼻の高い人がでてきた。灰色のズボンが、前の方は絵具だらけで、右の手の平が真っ赤で、爪じゅう
黒い絵具や赤い絵具がついていた。

田中さんという人が

「あなた方、こっちへいらっしゃい」と先にたつて、彩色場の方へいった。ぼんやりしていた私達は、あわて
てその後からついて行きました。

入って見ると20センチ位の花をもった、男と女の人形が、たくさんあって、人が6人ぐらい居た。同じ人
形でも、自分々々何ダースか受持ってやってるらしく、一人々々のまわりに、多くあった。

その仕事を全部終えると、田中さんがやって来て、

「あんた方、こんどこれやって下さい」

といって、5寸のパープーを持ってきた。そしてそれを、そばの籠にいれた。手のついていない、かみの
毛の波になった裸人形です。

田中さんは、新しいクリームの入れ物の中へ「口赤」と白いエナメルで書いてある瓶をふってごぼごぼと
音をたててついで。それからみんなの居る方へ行って、学校で使う丸筆と同じようなのを2本持ってきてくれ
た。筆がこちんこちんにかたまっていた。

田中さんはそれを絵具の中で、トントンとゆすぐようにしてやわらかに、パープー人形の頭を持って、

「これね、この窪んだ所にある口をやってもらうんです。こう持って、筆をこら辺からこう持って、ちょんとこうゆうふうにやって下さいよ。筆を軽く使ってね」

と云いながら、パープーの口を、5、6個やって見せた。そして田中さんが「はい」といって私に筆を渡した。



私はパープーをもってやろうとしても、筆をそばへよせると、穂先がぶるぶる震えてきてよく出来ない。そばで田中さんが見ているのでなおさら出来なかった。それでも少しやっている、だんだんふるえないようになった。1ダース目位の時、筆に絵具をつけっぱなしで、こかずにそのままやったら、絵の具が滴のようになってたれたので、パープーの小さい顔中にパアッと広がってしまった。

* * * * *

P2のアンダーライン わたくしの仕事はね、セルロイド、ほら、お人形さんの手や足ね、あれが、これくらいの大きさのセルロイドに、いくつもあるの

大きなパープーのことを書いている、と思います

P3のアンダーライン 開け放しの、トタン造りの、セルロイドの大きな人形が積んである部屋
この7所も「大きなパープー」のことを言っている、と思われま

* * * * *

小林大八セルロイド工場で大きなパープーを作っていたことは、サロン第77回(前回)の大八工場全員の写真からも判断出来ます。

その大きな(20吋程度)セルロイドのパープー人形は輸出用に作られていたので、現在日本国内では見当たりません。

右写真は、横浜館にあるアメリカ帰りのセルロイド製パープーです。何れアメリカから20吋程のパープーも、セルロイドハウス横浜館に帰って来るだろう、と思っております。



____次回・パープーは(4/4)です____
平成27年2月27日